

「研究活動面における社会との連携及び協力」評価報告書

(平成13年度着手 全学テーマ別評価)

富山医科薬科大学

平成15年3月
大学評価・学位授与機構

大学評価・学位授与機構が行う大学評価

大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

1 評価の目的

大学評価・学位授与機構（以下「機構」）が実施する評価は、大学及び大学共同利用機関（以下「大学等」）が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう、大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより、その教育研究活動等の改善に役立てるとともに、評価結果を社会に公表することにより、公共的機関としての大学等の諸活動について、広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

2 評価の区分

機構の実施する評価は、平成 14 年度中の着手までを試行的実施期間としており、今回報告する平成 13 年度着手分については、以下の 3 区分で、記載のテーマ及び分野で実施した。

全学テーマ別評価（教養教育（平成 12 年度着手継続分）、研究活動面における社会との連携及び協力）
分野別教育評価（法学系、教育学系、工学系）
分野別研究評価（法学系、教育学系、工学系）

3 目的及び目標に即した評価

機構の実施する評価は、大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう、当該大学等が有する目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため、大学等の設置の趣旨、歴史や伝統、人的・物的条件、地理的条件、将来計画などを考慮して、明確かつ具体的に目的及び目標が整理されることを前提とした。

全学テーマ別評価「研究活動面における社会との連携及び協力」について

1 評価の対象

本テーマでは、大学等が行っている社会貢献活動のうち、社会一般を対象として連携及び協力を意図して行われている研究活動面での社会貢献について、全学的（全機関的）組織で行われている活動及び全学的（全機関的）な方針の下に部局等において行われている活動を対象とした。

対象機関は、設置者（文部科学省）から要請のあった、国立大学（短期大学を除く 99 大学）及び大学共同利用機関（総合地球環境学研究所を除く 14 機関）とした。

2 評価の内容・方法

評価は、大学等の現在の活動状況について、過去 5 年間の状況の分析を通じて、次の 3 つの評価項目により実施した。

研究活動面における社会との連携及び協力の取組
取組の実績と効果
改善のための取組

3 評価のプロセス

- (1) 大学等においては、機構の示す要項に基づき自己評価を行い、自己評価書（根拠となる資料・データを含む。）を平成 14 年 7 月末に機構に提出した。
- (2) 機構においては、専門委員会の下に、専門委員会委員及び評価員による評価チームを編成し、自己評価書の書面調査及びヒアリングの結果を踏まえて評価を行い、その結果を専門委員会で取りまとめ、大学評価委員会で平成 15 年 1 月末に評価結果を決定した。
- (3) 機構は、評価結果に対する対象大学等の意見の申立ての手続きを行った後、最終的に大学評価委員会において平成 15 年 3 月末に評価結果を確定した。

4 本報告書の内容

「対象機関の概要」、「研究活動面における社会との連携及び協力に関するとらえ方」及び「研究活動面における社会との連携及び協力に関する目的及び目標」は、当該大学等から提出された自己評価書から転載している。

「評価項目ごとの評価結果」は、評価項目ごとに、「目的及び目標の達成への貢献の状況」（「目的及び目標で意図した実績や効果の状況」として、活動等の状況と判断根拠・理由等を記述し、当該評価項目全体の水準を以下の 5 種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いて示している。

- ・十分に貢献している。
- ・おおむね貢献しているが、改善の余地もある。
- ・かなり貢献しているが、改善の必要がある。
- ・ある程度貢献しているが、改善の必要が相当にある。
- ・貢献しておらず、大幅な改善の必要がある。

（「取組の実績と効果」の評価項目では、「貢献して」を「挙がって」と、「余地もある」を「余地がある」と記述している。）

なお、これらの水準は、当該大学等の設定した目的及び目標に対するものであり、大学等間で相対比較することは意味を持たない。

また、評価項目全体から見て特に重要な点を、「特に優れた点及び改善を要する点等」として記述している。

「評価結果の概要」は、評価の対象とした取組や活動、評価に用いた観点、評価の内容及び当該評価項目全体の水準等を示している。

「意見の申立て及びその対応」は、評価結果に対する意見の申立てがあった大学等について、その内容とそれへの対応を併せて示している。

「特記事項」は、各大学等において、自己評価を実施した結果を踏まえて特記する事項がある場合に任意記述を求めたものであり、当該大学等から提出された自己評価書から転載している。

5 本報告書の公表

本報告書は、大学等及びその設置者に提供するとともに、広く社会に公表している。

対象機関の概要

大学等から提出された自己評価書から転載

- 1 機関名：富山医科薬科大学
- 2 所在地：富山県富山市
- 3 学部・研究科・附置研究所等の構成
(学部) 医, 薬
(研究科) 医学系, 薬学
(附置研究所等) 和漢薬研究所
(附属施設) 附属病院, 附属図書館, 保健管理センター, 薬用植物園(薬), 薬効解析センター(研究所)
(学内共同施設) 生命科学実験センター, 実験実習機器センター, 情報処理センター(), 先進医薬共同開発推進センター() (は学内措置)

4 学生総数及び教員総数

学生総数：1,637名(うち学部学生数1,278名)

教員総数：361名

5 特徴

本学は、既存の富山大学薬学部と同大学和漢薬研究所及び新設の医学部を母体として昭和50年に設置された。平成5年に医学部に看護学科が新設され、2学部3学科、1研究所、1附属病院の構成となり今日に至っている。

本学の特色の第一は、医・薬・看を基軸にした構成自体にある。第二の特徴は、富山の地で育まれた和漢薬を中心とした東洋医学を近代西洋医学と融合し、医薬一体の総合治療学の創設を目指す構造になっていることである。そして第三には、少子高齢化・情報化・環境破壊など時代の激変に対応すべき健康医学を視野に入れた総合的医療・保健大学としての機能を担っていることである。

本学建学の理念は、創設記念碑に刻まれている「里仁為美」という言葉に集約されている。この言葉は、「人間性豊かで心技ともに優れた医療人を養成し、信頼され心の通い合う医療活動を行う」という精神のあり方を表していると理解される。この理念のもとに、本学では次の3項目を目標に掲げている。

- 1) 慈愛の精神に溢れ、高い技術力を備えた医療人の育成
- 2) 命の尊厳と共生を理念とする地域・国際社会への貢献
- 3) 先端的・独創的な国際レベルでの医薬学研究的の推進

このような本学の特性と実績を基盤に、これまで国際的にも高い評価を受けてきた研究活動を強力に押し進め、東西医学を融合した統合的な医学・薬学の研究を軸に、地域や国際社会に向けた知の発信源となることを目指しているのである。

研究活動面における社会との連携及び協力に関する考え方

大学等から提出された自己評価書から転載

1 「研究連携」に関する考え方

大学はその知的活動を広く社会に還元するとともに、次世代を担う人材の育成を通して社会に貢献している。さらに本学は、医療・福祉の実践という面からも地域社会の保健・健康の向上に貢献している。しかしながら、社会全般にわたっての改革が進行している状況下、大学はこれまでの枠組みを超えた、より一層の社会的貢献が求められるようになってきている。因に、新たな産学連携を構築することにより、新産業の創出や地域振興ならびに学術研究の活性化を図ることが強く望まれている。

一方、本学が位置する富山は、伝統産業として和漢薬を活用した薬業があり、地域産業の中でも大きな比重を占めている。こうした地域の特性を活かすために、大学、県、地域産業界が有機的に連携し、新たな産業創成を目指すことは本学に課せられた重要な課題である。さらに、少子高齢化や疾病構造の変化等、医療を取りまく社会状況の変貌に対応して、疾病を生み出す環境(自然ならびに社会環境)の問題を含めた保健・健康に関する住民の関心が高まって今、地域社会全体の健康・福祉の向上のために、本学の人的ならびに社会的資源を活用する必要性は益々増大しているといえる。

このような社会状況にあって、本学においては、大学が本来的な医学・薬学研究を深化しつつ地域社会と緊密に連携することは、広く国際社会の医療・福祉にも貢献する新たな知的価値を創出し、これらの努力をとおして大学自体の活性化と学術研究の向上をも可能にする最も有効な方策の一つとらえている。

2 取組や活動の現状

過去5年間の取組を把握するため、次の資料を用いた。

- 1) 届け出により大学事務局で管理しているもの
 - 2) 講座等を対象に実施したアンケートに基づくもの
- これらの資料に記載された取組や活動は多岐にわたるため、本項では「研究連携」の分類2項目について、それぞれ実施主体側からA:全学、B:部局(学部等)及びC:講座・学科目又は個人規模の3段階に分類し、表1に示すように併せて6つのカテゴリーに分けて記載した。以下に、「研究連携」の基本的考え方と併せて、主要な活動及び取組を取り上げ、その概要を記す。

表1：本学における「研究連携」の分類

分類 実施主体	分類1「社会との 連携及び協力する ための取組」	分類2「研究成果 の活用に関する 取組」
	A：全学	カテゴリーa
B：部局（学部等）	カテゴリーb	カテゴリーe
C：講座・学科目 又は個人	カテゴリーc	カテゴリーf

分類1「社会と連携及び協力するための取組」

*カテゴリーa

- 1) フォーラム富山「創薬」：本学が主導する産官学の連携組織として平成12年に設立され、本学受け入れ組織として「先進医薬共同開発推進センター」が設置された。定例研究会を基盤に、共同研究、受託研究、研究者の受け入れ、特許又は商品化を意識した研究等が具体化されつつある。また、フォーラム分科会として「富山県オリジナルブランド医薬品開発研究会」と「Toyama Medicinal Chemistry Society (TOMECS)」の2組織が設置された。
- 2) 寄附講座等：平成11年に、民間資金を活用し、和漢薬研究所に「漢方診断学部」が開設され、引続き平成14年度から3年間の継続設置が決定している。
- 3) 和漢医薬学研究による連携：和漢薬の基礎及び臨床応用に関する研究に対して、共同研究、受託研究、奨学寄附金等の外部資金導入、県内外の製薬企業からの受託研究員の受け入れ等の取組が実施されている。
- 4) 臨床研究による連携：医学部臨床部門における受託研究、臨床研究、奨学寄附金の受け入れ、地域病院から委託された病理解剖、病理組織検査等の活動・取組がある。
- 5) 研究者総覧公開等による研究情報提供：本学における「研究者総覧」の刊行及びホームページ運営ならびに学外機関のデータベースへの協力により、研究者情報（研究領域・業績・得意技術・その他）を提供している。
- 6) 国際的拠点大学としての活動：医学部和漢診療学講座は、昭和63年にWHOの伝統医学研究協力センターとなり、国際的学術交流の拠点として活動している。さらに、平成13年度に国際交流事業（日本学術振興会）の拠点大学に選ばれ、和漢薬研究所が中心となって、タイ、ベトナムとの学術交流拠点となっている。

*カテゴリーb

- 1) 和漢薬研究所独自の連携活動：附属民族薬物資料館の公開、国際伝統医薬シンポジウム、夏期セミナー、公開講座、研究所年報等による研究情報の公開及び情報交換を通して、学外の専門家及び市民との連携あるいは啓蒙活動を恒常的に実施している。

*カテゴリーc

- 1) 富山薬理集談会：県内の産官学に所属する薬理学関連領域の研究者が連携し、平成7年に設立された。研究発表会、講演会、技術講習会等の定例活動を実施している。
- 2) 医薬統合科学に関する連携：医薬が関連する領域のライフサイエンスに関して、共同研究、受託研究等の連携が多数実施されている。脳科学に関連して、外部資金を導入した共同研究、受託研究、企業研究員の受け入れ等による国内外との連携が活発に行われている。
- 3) 和漢薬・バイオテクノロジー研究：富山県が県内研究機関に委託する事業であり、例年本学の医・薬・看の研究チームが参加し、多くの実績を上げている。

分類2「研究成果の活用に関する取組」

*カテゴリーd

- 1) 各種審議会・委員会への参加：医学・医療・福祉・薬業に関連した国・県・市町村・民間企業等が設置する各種審議会・委員会等、合わせて321（5年間）に委員を派遣している。

*カテゴリーe

- 1) 民族薬物資料館データベースの公開：収集されている漢方薬等の民族薬物の基原や適応などの資料を、一般と専門家向けに、インターネット上に公開している。

*カテゴリーf

- 1) 専門的な講演・研修会等：基礎医学（高次脳機能に関する研究会等）、社会医学（イタイタイ病研究会等）、臨床医学（糖尿病、肝炎、心臓病、リウマチ研究会等）、看護学（ストーマ研究会等）及び薬学（和漢薬に関する研究会等）の専門組織（学会・研究会等）が行う講演会、研修会等を主催又は講師として参加している。
- 2) 社会医学に関する連携：各種住民健康調査、花粉症や自然環境に関する調査等への協力、法医（司法・行政）解剖、親子鑑定等による地域貢献が行われている。
- 3) 技術相談、心理臨床相談等：（県）消防学校、感染症等の対策連絡協議会、理学療法士協会、地方検察庁、警察医会、医師会、薬剤師会、栄養師会、看護協会、イタイタイ病認定審査会等へ講師を派遣している。

研究活動面における社会との連携及び協力に関する目的及び目標

大学等から提出された自己評価書から転載

1 目的

(1) 沿革と理念

初めに述べたごとく、本学は「西洋医学と東洋医学の融合統一」と「医学・薬学・看護学の有機的連携」を建学の理念に掲げている我が国唯一の大学である。この建学の精神をどのように発展させ、その成果をどのように発信していくかは本学における最も重要な課題である。さらに本学が立地する地域は、伝統に培われた和漢薬を中心とした薬業が盛んであること、イタイタイ病発生地として知られる大規模な環境汚染地域を有することなど、他に類のない顕著な特徴がある。これら地域の特性に応じた医薬品の研究・開発あるいは環境汚染の実態究明などについて、住民からはとくに強い期待が寄せられていることを認識する必要がある。このことから、大学本来の活動である人材育成や知的情報の発信源としての役割に加え、地域社会と連携して新産業創出や地域振興にも積極的な役割を果たす責務があるといえる。

(2) 基本方針

上に述べたことを踏まえて、本学においては、全てのマンパワーと社会資源を駆使した医学・薬学・看護学に関する統合的かつ先進的研究を通して、富山県の健康水準の向上と地域住民の福祉に貢献することを基本方針としている。これにより、建学の理念に掲げられた精神を具現化し、心身の健康に関わる知識の深化と行動の変容を援助し、いのち輝く社会の実現を目指す。

そのため、本学の特性を最大限に発揮できる次の3つの目的を掲げ、それぞれの具体的課題の実現に向けた戦略を立てることとした。

- 1) 伝統薬の再評価を含め、新しい視点に立った医薬品の開発研究を推進し、そのアウトカムを活かして地場産業（製薬業）の発展を図ること。
- 2) 近代的実証主義を組み入れた新しい和漢医薬学研究を推進し、その成果を地域に還元しつつ、国内外における中心的な研究拠点としての機能を再構築すること。
- 3) 環境問題を含めた総合的保健・健康医学を推進し、医療の実践と研究情報の公開を通して、住民の健康意識の向上ならびに地域の医療技術の向上を図ること。

2 目標

(1) 「創薬」をテーマにした産官学連携

- 1) 地域の産（薬業界、製薬企業）、官（県の関連機関）、学（本学、富山大、県立大）が連携して組織化したフォーラム富山「創薬」を拠点として、以下にあげる活動を本学が主導する。
- 2) 年3回の定例学術研究会を基盤に、医療・医薬品情報の交換、共同研究プロジェクトの育成・支援、研究員の受け入れ等の人的交流、研究資金の開発等、を図る。
- 3) その成果として、新しい視点に立つ創薬の実現、特許取得又は商品化による産業創出等で地域振興を図る。

(2) 和漢医薬学研究を基盤にした連携

- 1) 和漢薬研究所及び医学部和漢診療学講座を中心に、東西医学を融合した新しい和漢医薬学研究を推進し、これを基盤として以下の活動を行う。
- 2) 民族薬物資料館の公開、同資料館データベースの公開、和漢医薬学に関する研究会、公開講座、セミナー、研修会等を通して地域社会と連携しつつ、国際交流及び研究情報の収集・発信のための体制を整備して和漢医薬学研究の世界的拠点としての機能を再構築する。
- 3) 民間資金を活用した共同研究及び受託研究プロジェクトの育成・支援、企業からの研究員の受け入れ等、フォーラム富山「創薬」とも連動して、和漢薬由来の新薬の創出及び新しい臨床応用法の開発を図る。
- 4) 東洋医学の理念である Care と Cure を統合する臨床医学・看護学の実践及び専門家への技術相談や指導等の活動による地域貢献を図る。

(3) 総合的保健・健康医学による連携

- 1) 地域の環境汚染による健康障害（イタイタイ病等）あるいは産業・労働環境に起因する健康障害に関する研究を推進し、その成果を住民に還元するとともに、関連する審査会、審議会、調査会等と連携して、地域の健康・保健政策に反映させる。
- 2) 地域における高度・先端医療のセンターとしての施設や組織を整備し、地域に特有な生活習慣病、痴呆を含む高齢者の脳機能障害、がん、その他多くの難治性疾患の臨床及び基礎研究ならびに人的交流と医療実践を通して、地域の医療・看護・福祉の専門家と連携する。

評価項目ごとの評価結果

1. 研究活動面における社会との連携及び協力の取組

目的及び目標の達成への貢献の状況

産官学連携を運営・実施するための体制として、県行政機関、経済団体及び企業との間に産官学連携組織のフォーラム富山「創薬」を創設し、活動を推進するため2つの分科会を設置し、大学が主導的体制で運営しており、協力体制を整備している点は優れている。

学内組織として「先進医薬共同開発推進センター」を設置し、学術情報の提供、共同研究プロジェクトの企画・実施、研究開発に関する技術相談、産学連携に関する広報及びフォーラム富山「創薬」の運営支援等が行われており、これらの事業は医薬学研究を基盤に民間等と連携を構築するための中心的組織として優れている。

共同研究等委員会は副学長、病院長、部局長により構成され、フォーラム富山「創薬」、民間との共同研究及び外部資金の導入等を促進しており、研究連携の企画・立案の中核として連携活動に関するデータの管理、活動全般を学内に周知させるなど、産学連携を推進する体制を整備していることは優れている。

大学教員の発明に関わる権利の帰属等は、発明委員会において審議しているが、特許申請や商品化のプロセスには関与しておらず、発明等を推進し産業化に関与するシステムが構築されていないことから問題がある。

研究連携の活動内容及び推進のための方策として、フォーラム富山「創薬」において設定されたテーマをもとに、企業と大学側の双方から紹介しあい、研究及び現況報告中心に活動している。フォーラム富山「創薬」及び2つの分科会活動の推進により新薬の開発研究を行い、研究連携に関わっている点は相応である。

教員及び附属病院医師の研究情報を「研究者総覧」等により学内外に公表し、学外の専門家や一般市民との連携を深める方策として研究会、研修会等を行っていることは相応である。

和漢薬研究所は研究連携活動として、研究会、講習会、セミナーの活動及び附属民族薬物資料館・同資料館データベースの公開等を通じて、和漢薬に関する情報を国内外に発信している。これらの活動を支える組織として、研究部門、附属施設及び寄附講座を設置するなど、新しい研究の展開に対応した組織改革に取り組んできた点で

優れている。

産学連携について広報冊子の配布及びホームページの登載により、学内、県内企業及び行政機関等に周知を図っている。学内における周知と学外への公表として産学連携の情報発信の体制、範囲、方法は相応である。

民間等との共同研究や受託研究等の契約内容のデータを一括管理し、経費（契約金額）については、「全学教員別研究費データベース」に登録している。これらのデータは研究連携の実績把握と点検評価に活用しているものであり、研究成果及び経費の管理システムを実施する体制として、相応である。

富山県及び県内市町村が設置する医療等に関する各種委員会や審議会等に多数派遣して、医療・福祉等に関する地域のニーズに込えている状況は相応である。

研究成果の活用に関する国際的活動として、医学部和漢薬診療学講座は、WHOの「伝統医学研究協力センター」の指定を受け、伝統医学の教育・研究の世界的拠点として国内外から研究者及び留学生を受入れ、研究活動を行っていることは、相応である。

日本学術振興会が行う拠点大学方式によるアジア諸国との学術交流事業として、平成13年度に和漢薬研究所がタイ国との交流を行う日本拠点大学に選ばれた。実施期間は5年間、専門分野は薬学で、天然薬物に関する6研究課題を設定して国外の研究所と共同研究を行っていることは相応である。

貢献の程度（水準）

これらの評価結果を総合的に判断すると、取組は目的及び目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

特に優れた点及び改善を要する点等

フォーラム富山「創薬」は地域の大学、企業及び行政機関が連携及び協力した組織であり、富山県内の創薬関連企業と連携協力を促進する特色ある取組である。

大学教員の発明に関わる権利の帰属等は、発明委員会において審議しているが、特許申請や商品化のプロセスには関与しておらず、発明等を推進し産業化に関与するシステムが構築されていないことから改善を要する。

2. 取組の実績と効果

目的及び目標で意図した実績や効果の状況

フォーラム富山「創薬」主催の研究会及び交流会は、平成14年5月までに7回（年3回開催）を数え、毎回150人前後の参加者がある。これらの活動の効果として、2件の共同研究が薬学部において始まり、これによる受託研究員2人、研修員を1人受入れ、産学連携の推進に成果をあげていることから優れている。

共同研究の受入れは、平成9年度（0件）から13年度（8件）までに増加傾向である。なお、平成13年には、フォーラム富山「創薬」関連による3件の新規共同研究が加わっており、活動の実績は相応である。

受託研究の受入れについて、一般・出資金事業は、平成9年度（32件）から13年度（38件）までに増加傾向であり、医薬品等臨床研究は、平成9年度（83件）から13年度（50件）までに減少し、また、受託調査試験（病理組織検査）は、平成9年度（4,385件）から13年度（9,831件）までに増加している。これらの活動の実績は相応である。

受託研究員の受入れは、平成9年度（6人）から13年度（10人）までに増加傾向であり、奨学寄附金の受入れは、平成9年度（623件）から13年度（598件）までに減少傾向である。これらの活動の実績は相応である。

発明等の届出件数は、過去5年間25件で、平成9年度（1件）から13年度（10件）までに増加傾向であり、このうち10件については、現在、商品化を前提に企業に譲渡又は企業と連携して特許を出願中であることから、活動の実績は相応である。

公的機関及び民間が設置する各種委員会等に多くの委員を派遣してニーズに応じ、自治体や地域の各種団体の活動を支えている。派遣の件数は多く、これらの活動は大学の活性化にも寄与していることから相応である。

寄附講座「漢方診断学部門」が漢方医学研修コースを開講し、全国から医師、薬剤師、学生が受講している。研修の効果については、アンケート調査の結果、研修の質は「適当」と83%の回答があったが、受講者数は多くないことから効果については部分的であり、相応である。

和漢薬研究所の連携活動として国内外の学生・社会人・専門家を対象としたセミナー及びシンポジウムを開催し、漢方の普及・啓蒙に努め、毎回100名～150名の全国からの受講者の参加を得ており、研究成果の活用

実績は相応である。

和漢薬研究所附属民族薬物資料館データベースを整理し、生薬に関するデータをインターネット上に公開している。「日本語頁アクセス」、「英語頁アクセス」、「専門検索アクセス」及び「専門検索登録者」のそれぞれについて、平成12年度、13年度のアクセス件数は増加しており、研究成果の社会への還元の実績は相応である。

和漢薬研究所附属民族薬物資料館は、施設開放事業として一般公開を年1回行い、この期間以外にも随時開放しており、国内外から多くの見学者が訪れており、研究成果の社会への還元の実績は相応である。

薬理学関連講座を中心に、富山県内の研究機関及び製薬企業において薬理学関連分野の研究に従事している者と連携し、最近5年間に講演会（4回）、技術講習会（1回）、総会・懇親会（4回）を実施しており、研究成果の社会への還元の実績は相応である。

「和漢薬・バイオテクノロジーの研究」の受託研究は、医・薬・看に属する2～3講座で学内研究班を組織して研究を実施している。最近5年間の「和漢薬・バイオテクノロジーの研究」への参加講座数は平成9年度（16件）から13年度（18件）までに増加傾向であり、成果として、学会発表70件、論文投稿43編、実用化（商品化）1件があげられていることは相応である。

専門的な研究を活用して社会と連携する取組の点で、各講座等がそれぞれ社会と連携して多くの研究会等に参加し、活動している。フォーラム「創薬」の分科会「TOMECS」は講座規模の活動により発生したもので、外部資金導入を促しており、活動の実績は相応である。

■ 実績や効果の程度（水準）

これらの評価結果を総合的に判断すると、目的及び目標で意図した実績や効果がおおむね挙がっているが、改善の余地がある。

特に優れた点及び改善を要する点等

フォーラム富山「創薬」主催の研究会及び交流会は、平成14年5月までに7回（年3回開催）を数え、毎回150人前後の参加者がある。これらの活動の効果として、2件の共同研究が薬学部において始まり、これによる受託研究員2人、研修員を1人受入れ、産学連携の推進に成果をあげていることから、特に優れている。

3. 改善のための取組

目的及び目標の達成への貢献の状況

活動の状況及び問題点を把握する取組として、自己点検評価を行い、教育研究等の成果を地域に還元する努力が欠けていたことを反省し、外部評価によって学外者からの提言を受けて地域との連携を一層推進するための改革を行ってきた。平成 12 年に研究、教育、医療及び社会との連携等の現況をあらためて見直し、それらの問題点を改善するために中期計画としての行動指針「21 世紀の富山医科薬科大学像」を策定した。これに基づいてフォーラム富山「創薬」の設置・運営、先進医薬共同開発推進センターの設置、各種の情報サービスなどの改善を行っているが、社会との連携のためのニーズ調査や連携先相手の意見等の情報を把握する体制が未整備であることから、問題点を把握する体制は問題がある。

附属病院では、自己点検評価に合わせて平成 12 年に中期目標と実現可能な行動計画を策定した。具体的な目標として「地域連携医療室」及び「治験管理センター」の設置等の改善策を実現してきた。これらは診療ばかりではなく、研究活動においても社会的連携促進に寄与していることから、相応である。

社会との連携に対するニーズの探査として、フォーラム富山「創薬」では、研究会の出席者に対して毎回アンケートを実施し、活動全般に対する意見を求め、創薬情報に関する企業側のニーズを探索している。大学側は「学内ワーキンググループ」を作り、行政側は産・官・学から選出された役員が年 3 回の「幹事会」を開き、それぞれによる集約された意見と一般参加者の意見も取り入れる体制を整備していることから、相応である。

地域医療に関するニーズについては、地域医師会員にアンケート調査を行い、本学と地域医療機関と、より積極的な連携を必要とする意見が多数寄せられた。これらの問題点を改善すべく、既存の医療相談室を整備拡充し、地域医療連携室を設置した。しかし、ニーズ調査は一部の地域医師会員に対して実施されるだけで、他の地域、医師会以外の医療団体等を含めた住民全体のニーズを把握する取組は行われていないことから、問題がある。

社会との連携に関する情報がホームページあるいは広報冊子に掲載され、一般市民等に公開されているが、情報発信は大学側からの一方向性の情報サービスであり、連携改善のためのフィードバック・システムとしては不

十分であると外部からの改善の提言を受けたが、改善の状況として情報サービスの全学的システムを整備していないことから、問題がある。

学外機関からのフィードバックとして、本学学長及び医学部長が参加する富山県科学技術会議から知事に対して「新富山県科学技術プラン」が提言され、「富山県関連バイオ研究者データベース」が作成された。バイオ関連の取組として、「とやま医薬バイオクラスター」が選定され、その実施組織の「富山県新世紀産業機構」における「富山県バイオバレー構想」の一環として本学の医・薬に関する研究シーズ等を活用した地域の医薬品産業に新たな展開を図るなど、改善のための取組は相応である。

貢献の程度（水準）

これらの評価結果を総合的に判断すると、改善のための取組が目的及び目標の達成にかなり貢献しているが、改善の必要がある。

特に優れた点及び改善を要する点等

平成 12 年に研究、教育、医療及び社会との連携等の現況をあらためて見直し、それらの問題点を改善するために中期計画としての行動指針「21 世紀の富山医科薬科大学像」を策定した。これに基づいてフォーラム富山「創薬」の設置・運営、先進医薬共同開発推進センターの設置、各種の情報サービスなどの改善を行っているが、社会との連携のためのニーズ調査や連携先相手の意見等の情報を把握する体制が未整備であることから、改善を要する。

評価結果の概要

1. 研究活動面における社会との連携及び協力の取組

富山医科薬科大学においては、「研究活動面における社会との連携及び協力」に関する取組や活動として、フォーラム富山「創薬」主催の研究会及び交流会、民間企業等との共同研究、受託研究、奨学寄附金の受入れ、研究者総覧など研究情報の公開、各種委員会や審議会等の参加などが行われている。

評価は、産官学連携を運営・実施するための体制、研究連携の活動内容及び推進のための方策、目的・目標・趣旨の学内における周知と学外への公表、研究成果及び経費の管理システムを実施する体制、医療・福祉等に関する地域のニーズ、研究成果の活用に関する国際的活動の各観点に基づいて、取組や活動及びそれを実施するための体制が、目的及び目標の達成に貢献するものとなっているかについて行った。

これらの評価結果を総合的に判断すると、取組は目的及び目標の達成におおむね貢献しているが、改善の余地もある。

「特に優れた点及び改善を要する点等」としては、フォーラム富山「創薬」は地域の大学、企業及び行政機関が連携及び協力した組織であり、富山県内の創薬関連企業と連携協力を促進する特色ある取組として取り上げている。また、大学教員の発明に関わる権利の帰属等は、発明委員会において審議しているが、特許申請や商品化のプロセスには関与しておらず、発明等を推進し産業化に関与するシステムが構築されていないことから改善を要する点として取り上げている。

2. 取組の実績と効果

評価は、連携（活動）の実績、研究成果の活用の実績の各観点に基づいて、当該大学での取組や活動の成果から判断して、目的及び目標において意図する実績や効果がどの程度挙げられたかについて行った。

これらの評価結果を総合的に判断すると、目的及び目標で意図した実績や効果がおおむね挙げられているが、改善の余地がある。

「特に優れた点及び改善を要する点等」としては、フォーラム富山「創薬」主催の研究会等を実施したことにより共同研究が始まるなど、産学連携の推進に成果をあげていることから特に優れた点として取り上げている。

3. 改善のための取組

評価は、活動の状況及び問題点を把握する取組、社会との連携に対するニーズ探査、情報サービスの改善、学外機関からのフィードバックの各観点に基づいて、「研究活動面における社会との連携及び協力」に関する改善のための取組が適切に実施され、有効に改善に結びついていくかについて行った。

これらの評価結果を総合的に判断すると、改善のための取組が目的及び目標の達成にかなり貢献しているが、改善の必要がある。

「特に優れた点及び改善を要する点等」としては、平成12年に中期計画としての行動指針「21世紀の富山医科薬科大学像」を策定し、これに基づいてフォーラム富山「創薬」の設置・運営などの改善を行っているが、社会との連携のためのニーズ調査や連携先相手の意見等の情報を把握する体制が未整備であることから、改善を要する点として取り上げている。